

# 第四回留学報告書

白川亮

マサチューセッツ工科大学

こんにちは、マサチューセッツ工科大学経済学部の白川亮です。気がつけば二年生になっていました。

## 1. 個人的な話

結婚しました。ありがとうございます！そうすると、これまで個人的に大事だと思うことを好き勝手に研究してきましたが、今後のキャリアを以前よりは真面目に考えるようになりました。経済学の博士課程は最近ほとんどの学生が六年で卒業していますが、人生設計を考えると少し長すぎるように感じます。安定した生活を求めて、しかも就職活動もいつかはするのでしょうかから、早いうちに自分の専門分野をある程度固めて行きたい、とも考えています。

ボストンにいる日本人たち（船井奨学生の人たちも含めて）はみんなバスケットボールとかゴルフとかをしていて健康です。僕は去年両方とも結構行っていたのですが、今学期は一回だけバスケに参加したきり、朝が辛くて行けなくなってしまいました。運動しないととは思いますが、来学期は（寒くない日は）参加できるように頑張ります。

## 2. 授業の話

今学期は組織の経済学と計量経済学の授業をそれぞれ履修しましたが、二年生はそれとは別に「論文を実際書いてみよう」といった必修授業があります。四年後の就職活動の際に使えるような大規模な研究に取り組むというよりも、とりあえず研究を始めてみようというニュアンスの授業です。みんながそれぞれどのような事をやろうとしているかプレゼンテーションをする場にもなっていて、話を聞いて（正直なところ研究分野が異なりすぎてよくわからない場合が多いのですが）この人達頭いいなと感じています。

もちろん僕も何かできそうなことはないか考えました。一年の終わり頃から色々考えながら、市場設計の理論（特にマッチング理論）について研究しようと考えていました。少しだけ新しいことがわかったのでそのトピックにしようと思ったのですが、この報告書を書く直前に「どうやらこの問ではいい結果が全く得られません」といった結果が証明できたので全く違うことを考えることになるかもしれません。この種の結果は不可能性定理と呼ばれることがあり、ものによっては現実に素晴らしい示唆を与える技術的にも美しい結果とされていますが、僕が発見したそれが読者を感動させることが出来るのかはわかりません。

### 3. 研究の話

今学期の初めの方に「Feasible Search Behavior」というタイトルの論文を公開しました。元々公開していた「Information Design in Pandora's Problem」という論文を包含したものです。パンドラの問題という、複数個の選択肢を順に調べてまわってから意思決定をするような状況を考えています。そこで、それぞれの選択肢を調べた時に得られる情報量に依存して起こりうる、最適な探索の形の全体を特徴付けて、そこから得られる示唆をいくつか議論しました。元論文がある学術雑誌に投稿した際「このレベルには届いてない。でも〇〇か××なら簡単にアクセプトされると思う」と査読者がいうので助言通りにその後〇〇と××に投稿したのですがリジェクトされて、自信があったので納得出来ず色々何かできないか共著者と考えた結果、大改訂をしました。しかし勝負は振り出しに戻ったような感覚で、これから出版までまた数年かかるかと思うと長い戦いになりそうですが、挫けずに頑張ります。

東大時代の修士論文は「Simple Manipulations in School Choice Mechanisms」というタイトルに変わりました。前回の報告書にある通りあるジャーナルから改訂要求を受けていて、前回の報告書を提出する直前に再投稿して、今学期の中間あたりに二度目の改訂要求をいただきました。元々は三人査読者がいたのですが、そのうち査読者#1と査読者#3は「私のコメントに全て答えていて嬉しい、この論文の採択を薦めます」というふうなことをおっしゃってくださった一方、前回は肯定的なコメントをくれた査読者#2が残念ながらリジェクトを薦めています。それでも編集者は「査読者#2のコメントは大変重要ですが、出版にはそれほど遠くないと思う」と言って第二改訂ステージに招待してくれました。査読者#2から高度なコメントを受け取ったのに加えて、本当に何もしていないのですが途中で新しい査読者が参戦して各定理の証明に関するコメントを大量にいただいたため、それぞれ真面目に返答を考えて、今回の報告書を書き上げる直前に再投稿しました。いい報告ができるよう祈っています。

はじめに紹介した論文と違い修士論文は単著ですが、一人の改訂作業は心細いです。例えば到底対応できない気がする査読コメント（例えば元々やっとの思いでギリギリ奇跡的に証明できた定理に対して「その一般化ヨロシク！」等）を受けたとき、単著だと「これは一生対応できずにリジェクトされて終了か」みたいに思うのですが、共著者がいると「共著者と話したら解決するかも」とある程度気楽に過ごせます。今回の改訂では単著によるこういった精神的な負担を軽減するために、二度目の改訂要求を受けた直後に色々な人にすぐに相談して回りましたが、そうすると解決した場合も結構あったしおすすめです。

#### ■ 最後に

ボストンのバスケットボールコミュニティには、船井財団を通じた繋がりで参加することができました。研究にはもちろん全力を尽くしますが、バスケットは好きだし、せっかくいただいた運動の機会も無駄にしないようにしたいと思います。